

12月24～26日、市教組ならびに市教組青年部主催で沖縄平和教育フィールドワーク（以下、フィールドワークはFWと表記します）を開催し、18人の組合員が参加しました。沖縄県教組の山本元委員長を講師に迎え、座喜味城址、チビチリガマ、シムクガマ、嘉手納、普天間、佐喜真美術館、嘉数高台と、アメリカ軍侵攻の時系列に沿って詳しく説明していただきました。最終日、青年部のメンバーは、レンタカーで県南部にある摩文仁の平和祈念資料館、ひめゆりの塔を見学。最後は那覇に戻り、対馬丸記念館を見学しました。

以下に、参加者からの感想を掲載します。（紙面の都合上、若干、編集させていただいていることをご了承ください。）



今回、市教組で沖縄に行き平和学習を行う中で、広島とは違う戦争の怖さや惨さを感じました。私が最も印象に残っているのは、シムクガマの中に入り本当の暗さを体験し当時のことを想像したときのことで、自分には、少し蒸し暑く目を開けても閉じて少しの光も入ってこない。何とも言えない怖さがありました。その中に怪我をした人の呻き声、怪我したところをクチュクチュと音を立てて肉を食う“うじ”。そんな極限状態の中いつ切れるかわからない火をもとに生活していると考えたと、当時の人のまさに地獄という言葉の一端くらいはわかったような気がしました。でも、沖縄県教組の山本元委員長のお話にあったように、沖縄の話の怖いだけにするんじゃなくて未来に活かせる学習に変えていかないといけない。未来の子どもに同じ失敗をさせないために、よりよく生きていくために、教員として自分ができることを考えていくことがこの学習で必要だと強く思いました。（T K）

今回の研修は、本当に貴重な機会だったと思います。知識が増えたことよりは、心が揺さぶられた経験や、平和学習への意識が沖縄に来る前と変わったことが、自分にとってとても良かったと思っています。

戦争の被害は直接米軍によってもたらされたものばかりではなく、日本人によって、国のためにと命を落とした人がたくさんいました。戦争や世の中にある争いも、それぞれの譲れないものや大切なものを守ろうとして争いになっている事がたくさんあると感じます。でも何があっても侵してはいけない部分があり、それが人権、命だと学びました。しかし世の中の流れによって、特に戦争となると、その感覚も簡単に変わってしまうのだと知りました。そのような状況でも自分で考え判断するための人権感覚を、目の前の子どもたちの中に育てていくために平和学習があるのかなと今は思っています。平和学習と言われると難しいですが、普段の関わりの中で、大人も子どもも同じ1人の人間で相手も自分も大切にされるべきだということを体現することが、今自分に出来ることだと考えました。

同じ場所、同じ話、同じ資料だとしても、次にまた来ると感じるものや考えがまた変わっているんだろうと思います。学び続けるというのは、知識を増やすということだけでなくアンテナを張り続け自分の考えや感覚を深めていくことなのかもしれません。同じような思いをもった方々と一緒に学べ、思いを共有できる場があることがとてもありがたかったです。また他の研修にも参加したいと思います。（T Y）

沖縄には今まで観光で何度か訪れたことはあったが、学習会として沖縄に訪れたのは初めてだった。学ぶ姿勢で沖縄を見ると知らないことが山ほどあった。

初めてガマ（シムクガマ）に入り、懐中電灯の明かりを消した瞬間、目の前が真っ暗闇に包まれた。目も慣れてくるのかと思えば、慣れてくることはない。光が全く差し込まない空間。頭の中にいろんなことが巡った。今回の沖縄の平和教育FWに参加して、実際に自分の目で見て感じたことは、とても大きな学びとなった。この学びを子どもたちに伝えるためには、教師自身が目の前の問題に対して考え続けていくことだ。（M Y）

沖縄戦に関する学習会に参加するのは、初めてではありませんが、毎回、新たな学びがあります。今回のFWでは、自分自身と向き合う時間が多かったような気がします。

沖縄戦の事実を知るだけでなく、それをどう受け止めて、考えを整理し、行動に移していけるかが大切だなと感じました。私たちが行動に移す一歩は、子どもたちに伝え、一緒に考えていくことだと思います。「平和教育は目をそらしたい怖いもの」「自分とは遠い過去のこと」と感じさせるのではなく、「過去の事実から学び、現在できることを考え、自分や世界のよりよい未来をつくるために大切なこと」と伝えられるような実践を積み重ねていきたいです。

山本元委員長がお話して下さった「私たちの仕事は、自分が学ぶだけでなく、さらにそれを子どもたちに伝える必要がある」ということを重く深く受けとめました。（K Y）

小学生の頃、沖縄県に家族旅行へ行きました。綺麗な海、美味しい食べ物など楽しい思い出がいっぱい詰まった場所です。今回は勉強会で沖縄県へ行き、沖縄の歴史、知らないことがたくさんあり、衝撃を受けました。

特に衝撃を受けたのが、シムクガマです。足場の悪いところを600mほど歩き、みんなの懐中電灯を1分ほど消しました。真っ暗。沈黙。素直に怖かったです。当時はこの状況を2、3ヶ月。そして、ガマを一步出れば戦争。想像するだけで恐怖でしかなかったです。

沖縄のFWに参加して、「生きている幸せ」、「日常生活を送れている喜び」、「戦争の悲しみ」を子どもたちに伝えていかないといけないと感じました。そのために、私自身もっと学習会などに参加し理解を深めていきたいです。（M K）



【裏面に続く】

沖縄でのFWや学習会は初めてではありませんが(むしろそれではしか沖縄に行ったことがありませんが・・・)、2日目の山本元委員長が丸一日案内していただいたことは感謝!としか言いようがありません。本当に学びの場となったというだけでなく、教育や運動についてあらためて考えさせられたり、気持ち的に後押ししてもらったりしたような感じです。次の世代に伝えることが教育の役目であり、逆にそれが出来る仕事であることのおもしろさや大切さ、みんなに伝わらなくても一人でも感じ取ってもらえれば次につながっていけるという思いをもって活動を続ける事の大切さ、「本当にそうだな」って感じました。

FWに関しては読谷村からの動向を追いつけて回れたことが整理しやすかったし、基地問題の複雑さ、いまだに残る(続く)戦跡から読みとれるつらさや悲しさに常に考えさせられていました。2つのガマに行けたことも大きかったと思います。なにより、たくさんのメンバーと行くことは(飲み会も含めて!)いろんな話ができるのでほんとに楽しかったです。(T S)

人生3度目の沖縄での平和学習、これまでは2度糸数のアブラガマへ訪れたが、今回、初めてチビチリガマとシムクガマへ訪れることができた。2つの対象的なエピソードがあるガマでの学習で感じたことは、平和学習ではやはり現場で感じてこそ得られるものがあると言うことだ。事前学習などで2つガマについての知識は自分の中にあっても、やはり実際に現地へ訪れないと本やネットには載ってないような自分でしか感じ取れないことがあった。ガマ特有のひんやりとした空気感、暗くて見えにくい中、足場が悪いところを突き進む恐怖感、狭くて暑い中で息を潜める感じ、その中で「死ぬ」「生きる」決断をした人たちなど、自分の五感で体感したからこそ言語化できることがあった。

そして、基地を見学ができたことも、とても貴重だった。休日のためズラッと並んだ戦闘機、あれだけの数の戦闘機が普段から飛び交う日常はシンプルに「怖い」と感じた。また基地の中にある沖縄の人たちのお墓を見て、怖いと感じる中でも、その地から離れず暮らす現地の人たちの思いを山本元委員長から聞いて、今まで自分の中で何となく蚊帳の外だなあと感じていた基地問題について、もっと真剣に考えなければいけないと思うことができた。今回のFWで、得た知識や経験、考えとともに、また沖縄へ訪れたいと思った。個人的にも訪れたいが、ともに学び会える仲間と過ごす時間は本当に充実したものであったので、今後も市教組で沖縄FWを開催してほしい。(T A)

私は、沖縄平和教育FWに参加し、多くのことを学びました。山本元委員長から沖縄戦の話を生で聞き、現地を訪れたことで、より当時の様子を想像することができました。

その中で、私は、シムクガマで明かりを消したときの気持ちが何とも言えず忘れられません。ガマによって、生死の明暗が別れていたことを知り、心が痛くなりました。

昨年度、6年生とともに1年間平和について考えました。ゲストティーチャーから沖縄戦について講話をしてもらいました。そのときのこと踏まえ、私の中で聞いたこと、見たことが、今回のFWで一つになった気がします。戦争が終わったから平和ではなく、まだまだ残された問題に目を向けなければならないと思いました。

平和とは…これからも学んだことを子どもたちに伝え、子どもたちとともに考えていきたいです。(K Y)



沖縄に到着してすぐに、この場で戦争があったのだと改めて実感したのは、那覇空港に掲示されていた「不発弾の持ち込み禁止」の貼り紙を見た時です。持ち込む人がいるの?と疑問に感じたのと同時に、まだまだ不発弾が残っているのだと思いました。かつて空襲を受けた都市で不発弾が見つかったと報道で見たことがあるので、不発弾はもちろんまだ残っていると思います。しかし、持って帰ろうと思う人がいるくらい、不発弾を拾えるほど沖縄の地には、まだまだ残っている。そして、このことは、かつての悲惨な沖縄戦を物語っている一例だと感じました。

集団死があったチビチリガマとハワイ帰りの人の説得で全員が助かったシムクガマから、皇民教育の怖さと米軍に対する情報の洗脳の有無が出ていたと思いました。米軍に捕まると酷い目にあったり、惨い殺され方をしたりするという情報が伝わり、それを信じるしかない状態になっていたと思います。さらに、元従軍看護師が他国で見てきた軍人の残虐な殺し方を伝え、集団死に至ることになった。一方で、皇民教育を受けていない比嘉さんのように、米軍の捕虜になっても殺されないということを伝え説得する人がいたことで助かっている。また、「投降することは、非国民である」 ↑

「お国のために死ぬことは名誉なことだ」という考えがあたりまえだった中、死をとるか生をとるかという選択肢。この中で、生をとる選択の人は、当時では少数派であったと思います。それでも生き残るという選択肢をとって、ガマから出たチビチリガマの3名の視点も平和学習に必要なだと教えていただきました。平和学習といえば、戦争の恐ろしさを伝えることだけとなり、子どもたちに平和学習の恐怖だけが強く残ってしまう。沖縄戦をいかに生き抜いたかということも平和学習に必要なだと教えていただき、私も平和学習をするときに気をつけなければと実感しました。私が受けてきた平和学習を思い返すと、確かに戦争の怖さのビデオを見て、平和登校日が少し怖いなど思ったことがあったなと思いました。

最終日に、ひめゆりの塔へ行きました。ここへ訪れたのは今回で2回目でした。1回目は、中学生の時の修学旅行でした。中学生の私と年齢が近い人々が、戦争当時、学校で学ぶことができなくなった上に、ひめゆり学徒隊として戦場へ送り出され、命からがらガマの中で、医師の手伝いや軍人の世話をしていたことに衝撃を受けて、涙がこみ上げてきた記憶があります。2回目である今回は、ひめゆり平和祈念資料館がリニューアルされ、新しく知ったこともありました。また、教員という視点から見て新たに感じる部分もありました。勉強をして師範学校の入学試験に合格し、楽しい学校生活を送っていたひめゆりの方々。教員を目指して師範学校で勉強をしていたのにもかかわらず、戦争が激しくなって、勉強でなく生死を伴う場所へ送り出された事実で心を痛めました。戦争がなければ、当時の人々は、教員になれていたはずだ。子どもたちに囲まれて楽しい人生を送れたのではないかとと思うと何とも言えない気持ちになりました。また、師範学校の教員自身も引率するが、自分の教え子たちが戦地へ行かなければならないこと、自分の教え子が米軍に殺されたり負傷したりしたことを目の当たりにし、当時の教員の心中はいかながなものだったかと思い、また今回も涙が溢れてきました。

平和学習を続ける上で、何度も訪問を重ねることで前回までと違った視点から見ることができ、さらに知識を深められることを、改めて実感しました。そして、今まで訪れたことがない所へ案内していただき、自分自身のスキルアップとなったFWでした。参加でき、良かったです。3学期、6年生の社会科でちょうど太平洋戦争を学習するので、今回の学習を1月末に取り入れます。(O Y)